

【暗証聖句】「こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。」創世記/ 11 章 9 節

【日・ハムの呪い】

創世記 9 章 21～23 節「あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。カナン之父ハムは、自分の父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。セムとヤフェトは着物を取って自分たちの肩に掛け、後ろ向きに歩いて行き、父の裸を覆った。二人は顔を背けたままで、父の裸を見なかった。」

あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔っ払い、天幕の中で裸になっていました。それをハムが見て、2 人の兄弟セムとヤフェトに告げ口します。彼らは着物を取って後ろ向きに歩き、父の裸を見ないようにして着物を着せてあげます。酔いからさめたノアは、事の次第を知り、ハム（カナン）は呪われよと言い、他の 2 人の兄弟は祝福するのです。この物語は私たちに何を教えようとしているのでしょうか。彼らの違いは、ハムは父の醜態を見てそれを覆い隠すのではなく、人に告げた、つまり暴露したのに対して、セムとヤフェトは父の醜態を覆い隠した、しかも自分たちもそれを見ないようにして、父の尊厳を守ったということです。ここには罪を暴露するものと、それを覆うものの違いがあります。悪魔は私たちの罪を暴露し、私たちを救われる価値がないものとして神様に訴えます。しかし、主は裸のアダムの腰を、動物の毛皮で覆ってあげたように、すべての人の罪を覆うために、十字架にかかれたのです。またハムと他の二人の兄弟との間には、父ノアを敬う姿勢にも大きな違いがありました。これは十戒の第五の戒めでもある「あなたの父と母を敬え」と関係してくることで、父ノアの醜態は、けっしてほめられたものではありませんが、それを暴き出し、笑いものにしたり裁いたりするのか、それともその罪を覆い隠してあげるのか。ペトロの手紙一 4・8 に、「何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです」とあります。私たちも罪を覆う愛の人になりたいものです。

ところで、ノアはカナンは呪われよと、ハムの子であるカナンの子孫が呪われることを預言的に語りましたが、これは人種差別を教えているのではありません。後の墮落したカナン人のふるまいを念頭に置いているのです。カナンでは、不道德、異教の崇拜、子どものいけにえなどが広く行なわれていくようになります。しかし、そのカナンを主はイスラエルに与えられるのでした。主はハムの呪いを、人類の祝福に変えられていったのでした。

【月・創世記の系図】

聖書には非常に正確な系図が記載されています。その目的は、聖書の歴史性を強調することや、古代から現在までの連続性を示し、過去と現在を関連付ける事、また人間のはかなさや罪の悲劇的な影響を思い起こさせるなどがあります。この系図を見ると、ノアの洪水が起きた年に、ノアの祖父であるメトシェラが亡くなったことが分かります。メトシェラは生きたまま天に上げられたエノクの子供であり、最も長生きした人物（969 歳）としても知られていますが、実は父エノクはやがて洪水が起こることを主によって知らされており、自分の子どもにメトシェラという名前を付けたようです。その意味は「彼が死ぬとき、それは起こる」であり、メトシェラが亡くなる年に、洪水が起こることを暗示しています。おそらく年老いたメトシェラは、ノアを励ましたことでしょう。創世記 10 章には、「ノアの子孫である諸氏族を、民族ごとの系図にまとめると以上ようになる。地上の諸民族は洪水の後、彼らから分かれ出た」（創世記 10：32）と、「諸民族の起源」が記されています。ただ、系図のような詳細な記録ではなく、8 人だけになってしまった人類は、ノアの子どもたち、セム、ハム、ヤフェトからどのような民族が分かれていったのかがざっくりと書かれてあります。それによると、3 人に子どもから 70 部族が生まれたとなっています。70 という数字は、ヤコブがエジプトにわたってきたときの 70 人の家族や、荒れ野での 70 人の長老、イエス様が宣教に遣わした 70 人の弟子など、聖書の中にしばしば出てくるものです。また、セムはサアーニー・褐色（黄色人種）、ハムはフーム・黒色（黒人）、ヤフェトはいヤーフェト・白色（白人）と言う意味があり、3 つの人種を暗示しているのは興味深いところです。

【火・一つの言葉】

創世記/ 11 章 1 節「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。」

ノアの家族から民族が分かれていったわけですが、なぜ数多くの言語があるのでしょうか。もともとは一つの言語だったはずですが、しかし、現在数千もの言語があるといわれています。聖書には、たくさんの言語に分かれて

いった理由が書かれています。それはバベルの塔の物語です。

創世記 11 章 2～4 節「東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った」

なぜ彼らは高い塔を建てようとしたのでしょうか。一つは洪水によって死ぬことのないように、防災と言う意味があったのでしょうか。しかし、主は二度と洪水で滅ぼすことはしないと約束されていました。聖書の言葉を信じてことができなくなると、不安となります。だから自らの力で救いを得ようとし、それがうまくいくと、人間は高慢になり、「有名になりたい、自分を高めたい」という誘惑にかられるものです。また、「全地に散らされることのないようにしよう」とあります。一か所に集まることで全地に散ることを避けようと考えたのでしょうか。しかし、神様は「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と言われたのです。世界に広がっていくことが神様の御心だったのです。この点でも神様の御心の反対を生きようとする人間の姿を見ます。しかし、何よりも問題だったのは、「天まで届く」という言葉からわかるように、自分たちが神のごとく生きようと考えたことです。バベルの塔は高層神殿でもあったのです。そこで神様は大きな罪を犯すまにさせず、途中でストップさせられます。それが言葉を乱すことでした。後に、このバベルの塔が立てられたシニアルの地に、バビロンの王はエルサレムの神殿の祭具を持ち込みます。バビロンという言葉はバベルから来ているのはよく知られていることですが、バベルは「混沌・混乱」という意味の言葉です。混沌とした世界はいずれ倒れます。しかし、神様は秩序の神様なのであり、その中にこそ平和と安心があるのです。

【水・我々は降って行って】

創世記 11 章 5～7 節「主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

人間は天に上ろうとしましたが、皮肉なことに神様のほうが地上に降ってこられたのです。そもそも人間が神のもとに上ることなどできません。常に神様のほうから地上に降ってこられるのです。天におられても、神は人のすることを見ることのできたことでしょうか。また言葉を乱すこともできたでしょう。それにもかかわらず、天から降ってこられたのです。これは人との関わりを強調するためかもしれません。いつも遠いところにおいて、人間の悪に見過ごされるわけではないということを示すためかもしれません。しかし、神が天から降ってこられた究極の出来事は、人間を監視したり、裁いたりするためではなく、人間を救うためでした。御子イエス・キリストは人となって地上に降りてこられたのです。

【木・放浪者たちの願い】

創世記 11 章 9 節「こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。」

人間は散らされないようにバベルの塔を建てようとした。そして神様から独立した政府を樹立しようと考えていました。しかし、逆に神様は彼らを全地に散らされたのです。地に満ちて増えていくことこそが神の御心だったからです。

創世記 1 章 28 節「神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

全地に広がっていくように神様が言われたのは、全地を従わせるためです。神様は、人間をご自分に似せて創造され、この地球の管理者として立ててくださいました。この地は広く、飼うもののない羊のような状態だったので。だから、一か所に固まるのではなく、どんどん広がっていく必要があったのです。しかし、バベルの塔の建設を試みた人々は、神様の洪水で地を滅ぼすことはしないとの言葉を信じず、全地に満ちよとの神様の言葉にも従わず、あげくには、自分たちを神のようにしようと考えました。だから、神様は言葉を乱し、混乱させ、全地にちされたのです。